

ドラ・ガルシア
レクチャーパフォーマンス
『ロミオ』

Dora GARCÍA
Lecture Performance
“The Romeos”
8.3 Sat – 4 Sun

愛知県芸術劇場 大リハーサル室
Large Rehearsal Room, Aichi Prefectural Art Theater

情の時代
あいち
トリエンナーレ
2019
AICHI TRIENNALE 2019:
Taming Y'Our Passion



Photo: Takeshi Hirabayashi

「嘘から出たまこと」のパフォーマンス

「ロミオ」という名前には、多くの人の脳裏に浮かび上がる一定のイメージがある。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の登場人物、つまり若さゆえに愛に疾走する悲劇のヒーローのイメージである。だが東西冷戦時代、この名前が東ドイツの国策スパイ活動の作戦名だったことは、日本では全く知られていない。「ロミオ」は、東ドイツの秘密警察・諜報機関「シュタージ」の伝説的なスパイマスター、マルクス・ヴォルフによって考案された技法で、特別な訓練を受けた男性諜報員「ロミオ」たちは、敵対する西ドイツの行政機関で働く女性に好意的な態度で接近し、有効な情報を引き出すため、愛情やアテンションを与えていたという。彼女たちはその男性がスパイであることを薄々感づいていたのかもしれないが、それでもこの恋愛関係を享受しながら秘密情報を提供し続け、そのうち何組かは実際に結婚し、家庭を持つに至ったと言われている。

孤独な女性たちに男を差し向け、誘惑してスパイ活動に利用するなんてけしからん、という批判はさておき、ここで起こったロマンスは、果たして偽物の恋愛なのだろうか。スパイという任務を遂行するために築かれた関係性は、任務が完了すれば、すべてがフェイクだったということになるのだろうか。それとも、「嘘から出たまこと」という諺のごとく、スパイと女性たちのギブ・アンド・テイクの共犯関係こそが、現実世界における「まこと」なのだろうか。

スペイン出身のアーティスト、ドラ・ガルシアは、この問いを美術の文脈に持ち込む。ガルシアによって雇われた現代の「ロミオ」たちは、スパイのごとく展覧会場に紛れ込み、来場者に好意的に接近するという任務の遂行を指示される。もちろん自らをロミオと明かすことはない。アート作品の一部として展示されるポスターでは、スタイリッシュな服装に身を包んだ複数の「ロミオ」たちが、あたかも男性アイドルグループかファッションモデルのようにクールなポーズを決めており、そこ

には以下のようなテキストが重ねられている。「彼らの使命は、親しみやすく、何気ない振る舞いで来場者ひとりひとりを魅了すること。彼らの行動は完璧に礼儀正しく丁寧だが、相手の同意があれば、よりいっそう親密に接してこようとする。たとえば、より長い会話、ジョーク、告白、褒め言葉などで。会話はそこで終わるかもしれないし、新たな約束や友情につながるかもしれない。もしかしたら、恋にも。(略)このことを知ってしまった今、あなたは道を尋ねる魅力的な青年にどう接しますか？彼の優しい物腰と笑顔を信じますか？彼が演技しているとわかっていてもなお、彼の好意を受け入れて、それが続く限り、身を任せて楽しめますか？」

このプロジェクトは、2005年、マドリードでの初めての展示以来、ヨーロッパの諸都市やメキシコにおいて展開され、その都度ロミオと観客の間には、誰もが正確に知ることも記録することもできない、その瞬間の関係性が生成されてきた。好むと好まざるとに関わらず、ロミオたちが紛れ込んだ展覧会場を訪れるすべての来場者は、ロミオとの関係性において「パフォーマー」となる。展覧会場にいる複数の男性に対して、「もしかしたら彼はロミオかもしれない」という疑いの目を向ける。そして自分に話しかけてくる魅力的な男性がロミオだと知りながら、無視あるいは対話する。さらにはロミオが任務遂行中であることを逆手に、美術展の鑑賞をエスコートしてもらいつつ、悩みや愚痴を聞いてもらうこともできる。こうしたこれらの振る舞いは、すべて観客に委ねられてもいるのだ。

美術史家のクレア・ビショップは、20世紀以後の美術史における参加型アートの動向を演劇史に接続した著作『人工地獄 - 現代アートと観客の政治学』（2012）において、ティノ・セーガルと並んで、ドラ・ガルシアを「委託されたパフォーマンス」の代表的な作家として位置付けている。1990年代以降、プロのパフォーマーではない人々や、あ

る社会的属性を有する集団、他分野の専門家たちを雇い、一定の時間、一定の場所に、アーティストの代理、あるいは作品の一部として行為を委託（アウトソース）するパフォーマンスが展開されるようになった。こうした「委託されたパフォーマンス」の系譜の中でビショップは、ガルシアの一連のパフォーマンスを、アウグスト・ボアールの「見えない演劇」と接続する。1960年代ブラジル独裁政権下で『被抑圧者の演劇』を理論化・実践したボアールは、「見えない演劇」と称して、観客と演者の境界がなくなり現実の中で展開される演劇を志向した。そこでは、観客や参加者が、演劇という虚構を見ているとさえ気づかないような演劇的仕掛けによって、人々の意識を変革していく試みが展開されたのだ。それらは実際の行為なのか、それとも虚構なのか。その境界線をむしろ無化することで、すべての演劇実践は革命のための身振

りとリハーサルになる――。

今回のあいちトリエンナーレでは、美術展とパフォーマンスを接続する試みの一環で、ガルシア氏にレクチャーパフォーマンスを依頼した。ドラ・ガルシアの回答は、極めてシンプルだった。ロミオたちをアイドルグループの記者会見のように、あるいは犯罪者の身体検査のように人前に晒すこと。そこで彼らは、虚構の人物「ロミオ」として公衆の面前にたち、観客からの質問に答えることになる。だが、目の前に立つ彼は、ロミオなのか、彼自身なのか。その回答は、虚構なのか、真実なのか。彼はどこまでロミオとして存在し、どこから本人として振舞っているのか。そしてそれを誰が知ることができるのだろうか？レクチャーパフォーマンスは作品理解を深める答え合わせではなく、さらなる攪拌をもたらす場になるはずだ。

相馬千秋

（「あいちトリエンナーレ2019」パフォーマンス部門キュレーター）

ドラ・ガルシア

1965年バリャドリッド（スペイン）生まれ
バルセロナ（スペイン）／オスロ（ノルウェー）拠点

映像やインスタレーション、パフォーマンス、演劇、ドローイングまで、幅広い形態で制作を展開している。彼女は、制度によって管理される環境に対し、例えば観客が傍観者でいられない、議論が巻き起こるような演劇的状況を作り出し作品とする。その空間にはしばしばパフォーマーが介在し、観客のあらゆるタイプの行動や意思決定と共に、作品に影響を与えたり変化を及ぼしたりする。アーティスト、作品、観客をめぐる関係性を探ることで、コミュニケーションの過程に焦点を当て、観客が批評的な意識で作品に関わる重要性を視覚化する。



Photo: Bruno Dubner

Dora GARCÍA

Born 1965 in Valladolid, Spain
Based in Barcelona, Spain / Oslo, Norway

Dora García develops her practice across a wide range of formats, from media and installation to performance, theater and drawing. Her work generates performative situations requiring the participation of the spectators, pushing them to reflect on controversial issues related to institutional environments. A performer often intervenes in these environments, affecting or modifying the works according to any type of action taken or decision made by the audience. García's projects explore the relationships between the artist, the work and the public, focusing on cultural communication processes and making visible the importance of the public's critical participation.

Selected Works & Awards

2018 *Segunda Vez* (solo), Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía, Madrid, Spain
2012 dOCUMENTA (13), Kassel, Germany
2011 54th Venice Biennial, Spanish Pavilion, Venice, Italy
2008 16th Biennale of Sydney, *Revolutions – Forms That Turn*, Sydney, Australia
2007 Skulptur Projekte Münster 2007, Münster, Germany

主な作品発表・受賞歴

2018 個展「Segunda Vez」ソフィア王妃芸術センター、マドリード（スペイン）
2012 ドクメンタ（13）、カッセル（ドイツ）
2011 第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ、スペイン館、ヴェネツィア（イタリア）
2008 第16回シドニー・ビエンナーレ「Revolutions – Forms That Turn」、シドニー（オーストラリア）
2007 ミュンスター彫刻プロジェクト2007、ミュンスター（ドイツ）

Concept & Direction: Dora García

Cast: Shingo Asahara, Soutaro Ito, Sohki Mahara, Akihiro Mitsukawa,
Vitor Sato, Shoya Suganuma, Shinsuke Urano, Hiroya Yamada,
Yohei Yamauchi

Technical Manager: So Ozaki
Stage Manager: Makoto Kawaguchi
Interpretation: Kanoko Tamura (Art Translators Collective)
Simultaneous Surtitles: Kenichi Eguchi
Video Documentation: Daisuke Yamashiro
Photography: Masahiro Hasunuma

Curator: Chiaki Soma (Aichi Triennale 2019)
Production Manager: Sayuri Fujii (Aichi Triennale 2019)
Production Coordinator: Tsubasa Shimizu (Aichi Triennale 2019)
Matsuri Yamana (Aichi Triennale 2019)
Production Assistants: Satomi Muramatsu (Aichi Triennale 2019),
Kanako Yamasaki

Produced by Aichi Triennale 2019
Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co- Presented by Aichi Prefectural Art Theater
Supported by Embassy of Spain

コンセプト・演出: ドラ・ガルシア

出演: 浅原真悟、伊藤壮太郎、馬原颯貴、三ツ川明裕、佐藤ヴィトル、菅沼翔也、
浦野真介、山田裕也、山内庸平

技術監督: 尾崎聡
舞台監督: 川口真人
通訳: 田村かこ (Art Translators Collective)
同時字幕: 江口研一
記録映像: 山城大督
記録写真: 蓮沼昌宏

キュレーター: 相馬千秋 (あいちトリエンナーレ2019)
制作統括: 藤井さゆり (あいちトリエンナーレ2019)
制作: 清水翼 (あいちトリエンナーレ2019)
山名祭里 (あいちトリエンナーレ2019)
制作アシスタント: 村松里実 (あいちトリエンナーレ2019)、山崎佳奈子

製作 あいちトリエンナーレ2019
主催 あいちトリエンナーレ実行委員会
共催 愛知県芸術劇場
助成 スペイン大使館



「あいちトリエンナーレ2019」パフォーミングアーツ AICHI TRIENNALE 2019 / Performing Arts

キュレーター Curator

相馬千秋 SOMA Chiaki

アシスタントキュレーター Assistant Curator

藤井さゆり FUJII Sayuri

コーディネーター Coordinator

清水翼、村松里実 SHIMIZU Tsubasa, MURAMATSU Satomi

テクニカル・ディレクター Technical Director

尾崎聡 OZAKI So

票券 Ticket Administration

山崎佳奈子 YAMASAKI Kanako

翻訳 Translation

Art Translators Collective
(相模展子、ベン・ケーガン、リアン・キャンライト)

Art Translators Collective
(AISO Nobuko, Ben CAGAN, Lillian CANRIGHT)

編集・執筆 Editor/Writer

鈴木理映子 SUZUKI Rieko

編集: 鈴木理映子

デザイン: コバヤシタケシ (SURFACE)

印刷・製本: 藤原印刷

あいちトリエンナーレ2019 情の時代 2019年8月1日 [木] - 10月14日 [月・祝]

主な会場: 愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、名古屋市内のまちなか (四間道・円頓寺)
豊田市 (豊田市美術館及び豊田市駅周辺)

芸術監督: 津田大介 (ジャーナリスト/メディア・アクティビスト)

主催: あいちトリエンナーレ実行委員会

助成: 損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)
公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド
一般財団法人地域創造

AICHI TRIENNALE 2019: Taming Y/Our Passion

August 1 (Thursday) to October 14 (Monday, public holiday), 2019

Main Venues: Aichi Arts Center, Nagoya City Art Museum, Nagoya City (Shikemichi and Endoji)
Toyota City (Toyota Municipal Museum of Art and venues in the vicinity of Toyotashi station)

Artistic Director: TSUDA Daisuke (Journalist / Media Activist)

Organizer: Aichi Triennale Organizing Committee

Supported by Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc. [SOMPO ART FUND]
(Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture), Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture, Japan Foundation for Regional Art-Activities

